



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 子どもの自己と友だちについての記述の発達 |
| Author(s) | 嘉数, 朝子; 石橋, 由美 |
| Citation | 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(33): 511-517 |
| Issue Date | 1988-09 |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/1864 |
| Rights | |

子どもの自己と友だちについての記述の発達

DEVELOPMENT OF CHILDREN'S DESCRIPTION OF SELF AND FRIENDS

嘉数朝子* 石橋由美**

Abstract

The development of self-cognition and others-cognition was studied. Subjects were 6- and 10-yr-old children. They described themselves and the most preferred other (friend). Both for self-cognition and others-cognition, the number of statements containing descriptions of personal characteristics increased with age, too. It was found that self-cognition was different from others-cognition in 10-yr-old children. Namely, they described themselves using descriptions of negative personal characteristics and with the low level of others referent description. In contrast, they described others using the words of positive personal characteristics and with the high level of others (for the described other) referent descriptions, especially with self referent development. Similarities and differences between self-cognition and other-cognition development was discussed. While the development of self-cognition other cognition of children are based on the general cognitive development, they accord to the inherent developmental process.

子どもの他者記述の発達的变化として、加齢にともない記述数が増加することが報告されている (Scarlett, et al. 1971)。また、7～8歳頃、観察可能で具体的な属性や行動、および「良い」「悪い」などのおおまかな評価による他者記述の段階から、より抽象的で推測された内面的特性による他者記述の段階へと移行していくことが明らかにされている。(Perry & Bussey, 1984; Shantz, 1983)。この変化はPiagetの認知発達理論によって説明される。すなわち前操作期の子どもの思考は事物や事象の表面的特性にとらわれやすいので、外面的属性や行動で他者を認知する傾向が強い。具体的操作期の子どもの思考は事物や事象のみかけの変化に関わらず共通する内面的特性を推論する保存操作が可能になるので、内面的性格特性により他者を認知する傾向が強くなる。

他方、自己についての認知は、他者との交流を通して他者を認知することと密接に関連し合いながら発達していくと考えられる(柏木, 1983; 麻生, 1985; Damon, 1983)。したがって自己認知が、他者認知と共通の認知発達を基盤として成立しているとするれば、自己記述と他者記述は共通の特徴を有していると予想される。また加齢にともないそれらの特徴が発達的に変化していくと考えられる。Harter (1983) は自己概念の発達的变化についてモデルを提示し、幼児期は具体的行為により自己が記述され、児童期には具体的行為の諸側面が特性によって統合されると示唆している。Keller, et al. (1978) は幼児の自己は観察可能な具体的行為により主に記述されることを示した。土岐 (1985)、石橋 (1987) も同様の結果を得ている。

ところで石橋 (1987) は、4～6歳児の自由回答形式の質問法によって得られた自己と仲間についての記述を分析し、加齢にともない両概念とも

* 琉球大学教育学部

** 札幌医科大学衛生短期大学部一般教育科

に日常の具体的行為による記述が増加し、「好き
なところ-いやなところ」を分化させていくこと
を示した。しかしその変化は仲間についての方が
自己についてよりも先行していた。土岐(1985)
も5歳前半では自己より他者の方が表現しやすく、
5歳後半になると両者に表現の差異がなくなっ
てくると報告している。またHart & Damon(1985)
は、幼児、児童の自己・他者記述の事例を分析し
て、その年齢的变化については言及していないが
他者は自己との関わりで記述され、自己は特定の
他者との関わりで記述されると報告している。し
たがって自己と他者についての記述には、認知発
達に伴う共通の発達の特徴とともに、記述される
対象による差異も予想される。

そこで本研究では、幼児・児童を対象に、自己
と仲間について自由記述を行なわせ、自己・他者
記述の共通の特徴とそれらの発達的变化、及び両
記述の差異を検討することを目的とする。

方 法

被験児 那覇市内幼稚園児37名〔男児22名、
女児15名、平均年齢6歳2ヶ月(5:8-6:8)〕、
小学4年生36名〔男児18名、女児18名、平均年齢
10歳3ヶ月(9:10-11:0)〕を被験児とした。

手続き 調査用紙を用いて、幼児には個別に
質問し、言語反応を筆記記録した。反応がすぐに
得られない場合には、質問の理解を容易にするた
めに、質問を繰り返したり、内容を変えない程度
の修正をして再質問をした。小学生には集団的に
実施し、調査用紙に自分で記入させた。

① いちばん好きな友達の選択 他者記述の
対象はいちばん好きな友だちとした。これは幼児
にとって記述が容易である方がよいと思われたか
らである。「○○ちゃん(被験児)のお友達はだ
れ?クラスのお友達の中で一諸に遊んだり、おは
なしするいちばん好きなお友達(以下Fと略す)
はだれ?」という質問で、いちばん好きな友達を
選択させた。さらに、「Fちゃん一諸に何をし
て遊びたい?」という質問に対する反応により、
日常的に親しい交わりのあることを確かめた。

② 友達と自己の3段階評定 自由記述反応
を容易にするために、訓練として性格特性〔強い

ー両方ー弱い、やさしいー両方ーやさしくない〕、
行為〔遊び(縄跳び)がじょうずー少しじょうず
ーじょうずではない〕、所有〔おもちゃ(本)を
たくさんもっているー少しもっているーあまりも
っていない〕の6項目について、3段階評定を行
わせた。はじめは友達について、次に自己につい
て行わせた。幼児は、回答が困難だと考えられた
縄跳びと本の項目を除き、性格特性〔強い、やさ
しい〕、行為〔遊び〕、所有〔おもちゃ〕の4項
目について評定させた。

③ 友達と自己についての自由記述 以下の
3種の質問に対して自由記述させた。はじめは友
達について、次に自己について行わせた。

質問 a (What): 「○○ちゃんはどんな子です
か?」

質問 b (Like): 「どんなとき、○○ちゃんを
好きだと思いますか?また、○○
ちゃんのどんなところが好きで
すか?」

質問 c (Dislike): 「どんなとき、○○ちゃん
をいやだと思いますか?また、
○○ちゃんのどんなところがい
やですか?」

反応の分類

自由記述反応は、単一の意味内容を含むState
ment(単一文)に分割された。分割された反応
内容の分類および得点化の例がTable.1に示され
ている。

(a) 反応タイプ: 各被験児のLike-Dislike
質問に対する反応は、「両質問に言語反応する」、
「Like質問に対してのみ言語反応する」、「Dislike
質問に対してのみ言語反応する」、「両質問に対
し無回答」の4カテゴリーに分類された。

(b) 記述数: 友達と自己についての記述の
Statementの数は、各被験児ごとに得点化され
た。WhatとLikeとDislikeで同じ記述を重複し
て行った場合は、そのうちのひとつだけを得点化
した。

(c) 記述内容: Statementは、それぞれ以
下の4カテゴリーに分類された。すなわち、

行為: 一諸に遊ぶ、遊ぶのが好き、おこ

Table 1 A example of scoring free descriptions

| Question | Friend | | Self | |
|--------------------------|------------|----------|--------------|----------|
| | Response | Category | Response | Category |
| What | やさしい子です | PC | おそんだりする | A 1 |
| | あかるい子 | PC | おしゃべりをする人 | A 1 |
| Like | 絵がじょうずなところ | A 2 | 勉強を積極的にするところ | A 2 |
| Dislike | たたいたとき | A 1 | いらいらしているとき | A 2 |
| | わるぐちを言ったとき | A 1 | | |
| Scores | | | | |
| Actions | | 3 | | 4 |
| (A1) | | (2) | | (2) |
| (A2) | | (1) | | (2) |
| Personal Characteristics | | 2 | | 0 |
| Total | | 5 | | 4 |

Note. PC:Personal Characteristics; A1:Actions with a high level of others-referent; A2:Actions with a low level of others referent

るなど

性格特性：やさしい、あかるいなど

衣服・身体：黄色い洋服の子、ふとっているなど

その他

である。これは Keller et al.(1978)と石橋(1987)の用いたカテゴリーを修正したものである。各カテゴリーに分類された Statement の数は被験児ごとに得点化された。

(d) 行為カテゴリーにおける特定他者の関与レベル：行為カテゴリーに分類された。

Statement は、さらに「他者(記述された対象者にとっての他者)の関与レベルの高い行為

(Act 1)」と「他者の関与レベルの低い行為

(Act 2)」に分類され、それぞれの Statement の数が各被験児ごとに得点化された。「遊ぶ」という記述は他者関与レベルの高い項目として評定された。「遊ぶのが好き」という記述は、その行為に対する個人的な好みを表明と判断して、他者関与レベルの低い項目として評定された。

結果

反応数はそれぞれ各被験児ごとに開平変換($\sqrt{x+5}$)されて以下分析された。幼児については、全ての自由記述反応に無反応であった男女児各1名は除かれ、残り35名について分析された。評定の信頼性を得るために、本研究の評定者と経験のある発達心理学研究者の評定の一致度を算出した。ランダムに選択された38 Statement についての反応内容の評定の一致度は84.2%であった。行為カテゴリーに分類されたものからランダムに選択された37 Statement についての特定他者の関与レベルの評定の一致度は94.6%であった。

1 反応タイプ Like-Dislike 質問に対するそれぞれの反応タイプの年齢別の人数が Table 2 に示されている。10歳児で、両記述と反応タイプに有意な連関が得られた。 $(X^2 = 8.09, df = 2, p < .05)$ 。すなわち、10歳児では友達については Like 質問にのみ回答する傾向が強く、したがって自己についての方が友達よりも好きなどところといやなところの両方を記述するものが多かった。

Table 2 Numbers of subjects of each response type to Like and Dislike questions

| | Like & Dislike | Like only | Dislike only | No-answer |
|--------|----------------|-----------|--------------|-----------|
| (): % | | | | |
| 6 yrs | | | | |
| Friend | 18(51.4) | 10(28.6) | 2(5.7) | 5(14.3) |
| Self | 19(54.3) | 9(25.7) | 4(11.4) | 3(8.6) |
| 10 yrs | | | | |
| Friend | 16(44.4) | 17(47.2) | 1(2.8) | 2(5.6) |
| Self | 23(63.9) | 2(5.5) | 5(13.9) | 6(16.7) |

Note. The total numbers of subjects in each group (35 and 36 in 6 and 10 yrs gr.) were taken as 100 %, respectively. $\chi^2 = 8.09$, $p < .01$ for 10 yrs gr., no significant for 6 yrs gr..

2 記述数 両年齢群の自由記述における Statement の数の平均が Table 3 に示されている。2 (年齢: 6 歳, 10 歳) \times 2 (記述対象: 友達, 自己) の 2 要因分散分析が行われた。年齢と記述対象条件に, 有意には至らなかったが, 交互作用の傾向が得られたので ($F(1,69) = 3.38$, $p < .10$), 単純主効果の検定を行った。10 歳児の Statement 数が 6 歳児より多く (友達: $F(1,138) = 77.99$, $p < .01$; 自己: $F(1,138) = 11.67$, $p < .01$), 加齢とともに記述数においても分化していくことが示された。また, 10 歳児では, 単一文の数は友達の方が自己の場合よりも多かった。 ($F(1,69) = 6.58$, $p < .05$)。

3 記述内容 衣服・身体とその他のカテゴリーを用いた反応は少なかったため, 行為, 性格特性カテゴリーについて以下分析された。両年齢群の行為, 性格特性の平均得点が Table 4 に示されている。2 (年齢: 6 歳, 10 歳) \times 2 (記述対象: 友達, 自己) \times 2 (記述内容: 行為, 性格特性) の 3 要因分散分析が行われた。

年齢と記述内容の有意な交互作用が得られたので ($F(1,69) = 4.85$, $p < .05$), 単純主効果の検定を行った。行為, 性格特性による記述はともに加齢にともない増加し (行為: $F(1,138) = 5.26$, $p < .05$; 性格特性: $F(1,138) = 29.96$, $p < .01$), 6 歳児では性格特性よりも行為による記述が多かった ($F(1,69) = 15.85$, $p < .05$)。

Table 3 Mean numbers of statements (): SD

| Age | Objects | |
|--------|------------|------------|
| | Friend | Self |
| 6 yrs | 1.58(.43) | 1.58(.37) |
| 10 yrs | 2.01(.36) | 1.85(.35) |

Note. Numbers of each subject were $\sqrt{x+1.5}$ lranformed. The following effects were significant: age \times objects ($p < .10$); age at friend ($p < .01$); age at self ($p < .01$); objects at 10 yrs ($p < .05$).

年齢と記述対象と記述内容の有意な交互作用が得られたので ($F(1,69) = 5.85$, $p < .05$), 単純主効果の検定を行った。10 歳児の性格特性による記述が, 自己では友達より有意に少ないという結果が得られた。 ($F(1,138) = 21.83$, $p < .01$)。

Table 4 Mean scores of actions and personal characteristics in descriptions of friend and self

():SD

| Age | Contents and Objects | | | |
|--------|----------------------|-----------|--------------------------|-----------|
| | Actions | | Personal-Characteristics | |
| | Friend | Self | Friend | Self |
| 6 yrs | 1.24(.41) | 1.25(.41) | .80(.25) | .96(.29) |
| 10 yrs | 1.41(.42) | 1.42(.44) | 1.50(.29) | 1.20(.38) |

Note. Scores of each subject were $\sqrt{x + .5}$ transformed. The following effects were significant: age x contents($p < .05$); age at actions($p < .05$); age at personal-characteristics($p < .01$); contents at 6 yrs($p < .05$); age x objects x contents($p < .05$); objects at 10 yrs/personal-characteristics($p < .01$).

4 特定他者の関与レベル 行為カテゴリーに分類されたもののうち、「他者の関与レベルの高い行為」と「他者の関与レベルの低い行為」に分類されたStatement数の平均が、Table 5に示されている。2（年齢：6歳，10歳）×2（記述対象：友達，自己）×2（記述内容：他者の関与レベルの高，低）の3要因分散分析を行った。年齢と記述対象と記述内容の2次相互作用が有意だ

ったので（ $F(1,69) = 4.06, p < .05$ ），単純主効果の検定を行った。10歳児では，他者関与のレベルの高い行為による記述は自己よりも友達についての場合が多く（ $F(1,138) = 10.38, p < .01$ ），逆に他者関与レベルの低い行為による記述は自己の方が友達についての記述より多かった。（ $F(1,138) = 15.06, p < .01$ ）。

Table 5 Mean scores of actions with each level of others referent in descriptions of friend and self

():SD

| Age | Contents and Objects | | | |
|--------|----------------------|-----------|----------|-----------|
| | Act 1 | | Act 2 | |
| | Friend | Self | Friend | Self |
| 6 yrs | 1.10(.37) | 1.02(.33) | .88(.28) | .97(.36) |
| 10 yrs | 1.32(.41) | 1.10(.42) | .83(.26) | 1.01(.36) |

Note. Act 1: Actions with a high level of others referent; Act 2: Actions with a low level of others referent. Scores of each subject were $\sqrt{x + .5}$ transformed. The following effects were significant: age x objects x contents($p < .05$); age at friend/Act1($p < .05$); objects at 10 yrs/Act.1($p < .01$); objects at 10 yrs / Act2($p < .01$)

考 察

加齢にともなう自己・他者記述の共通の変化として，6～10歳の時期に自由記述におけるStatement数増加し，ともに分化がすすむことが示

された。しかし，「好きなところーいやなところ」の分化には，年齢的变化は見られなかった。

次に記述内容の分析によれば，6歳児の自己と友だちは性格特性よりも行為により記述される傾向が強いことが示された。これは他の研究結果と

一致しており (Keller, et al, 1978; 土岐, 1985; 石橋, 1987), 6 歳児が主に外面的で観察可能な行動により他者や自己を認知していることを示すと考えられる。行為や性格特性による記述は共に加齢にともない増加し, 10 歳児では具体的な行為による記述も性格特性による記述と同様に優勢であった。児童期の加齢にともなう性格特性による記述の増加は, 認知発達により説明できる。つまり自己と友だちについての記述は共に, 具体的な行動の諸側面の統合や内面的特性の推論を可能にするような認知の発達によって, 性格特性による記述を増大させていくと考えられる。

また, 6~10 歳児の時期の変化として, 他者を記述する場合, 記述される他者の行為に示される特定他者の関与レベルの変化が見いだされた。すなわち他者を行為で記述する場合, その行為の主体である他者にとっての別の他者 (これは, 記述者である自己の場合もある) の関与した行為で記述する傾向が, 加齢にともない増大することが示された。特に記述者自身 (自己) とその友達との間の行為によって他者を記述したものが, 6 歳児で 6 名, 10 歳児で 15 名いた。これは児童期に自己と他者の交流を通して, 自己との関係で他者を認知していく傾向を示しているものと考えられる。しかし自己についてはそのような特定他者の関与レベルの発達の変化は得られなかった。これは自己記述と他者記述の発達のプロセスの差異を示すものと考えられる。

自己と友だちについての記述の差異性は 10 歳児で示された。10 歳児が自己を記述する場合, いやなところについても記述するようになり, 自己について好きなところといやなところの両方を記述するものが増える。他者については好きなところのみ回答するものが多い。これは記述対象をいちばん好きな友達に限定したためかもしれない。

性格特性記述の内容を見ると, 性格特性記述に使われた語では, 6 歳児では「やさしい」を使用するものが, 友達については 8 名, 自己について 12 名いた。10 歳児では友達については 31 名, 自己については 3 名いた。また 10 歳児の使用する語は多様化し, 特に自己については「積極的でない」, 「気が強い」, 「短気」など 13 種類の否定的な意味の語の使用がみられた。つまり 10 歳児はいちば

ん好きな友達については「やさしい」など肯定的な意味の語を用いる傾向が強い。このため 10 歳児の性格特性による記述が自己よりも友達の方が多くなったと考えられる。自己については特に Dislike 質問に対して多様で否定的な意味の性格特性語の使用がみられた。これは小学校高学年の自尊感情の低下現象 (松田, 1986) と一致する結果であり, 10 歳児の内面的で批判的な観点からの自己意識を反映していると考えられる。

10 歳児の他者についての記述は, 特定他者の関与した行為, 特に自己の関与した行為で示される。これは Hart & Damon (1985) と一致した結果である。また, この 10 歳児の自己に関与する行為による他者記述は, Honess (1980) の示唆したように, 幼児期の思考の特徴である自己中心性というよりも, 自己と他者との共通性を示すものと考えられる。他方, 自己は他者関与レベルの低い行為でとらえられ, 他者と切り離して対象化される傾向が見いだされた。

自己・他者記述のこれらの差異性は, 両記述が共通の認知発達を基盤としつつも, それぞれ独自の発達プロセスに従っていることを示すものと言えよう。特に 10 歳児の自己記述において内面的側面や, 否定的側面にも目を向け始めることが示された。他方, 他者記述は自己との関係によって表現されることが示された。このような児童期の自己・他者記述はその後の青年・成人期の他者や自己についての内面理解に向って, どのように発展していくのであろうか。今後の検討課題としたい。

ところで本研究では他者をいちばん好きな友達に限定した。また, 発達年齢的な制約のため, 幼児については話しことばによる概念を, 児童については書きことばによる概念を取り出し比較したが, 話しことばと書きことばという表現手段による違いも無視できない。したがってここで得られた結果を一般化するにはさらに検討の余地がある。たとえば他の多様な関係にある他者についての認知と自己認知の関係についても今後検討される必要があると考えられる。

引用文献

- 麻生 武 1985 自己意識の成長 原野広太郎
他編 児童心理学の進歩 金子書房
- Damon, W. 1983 Social and personality
development. New York: Norton & Com-
pany.
- 土岐邦彦 1985 話しことばによる自己および他
者についての表現の発達と障害 心理科学 9,
36-43.
- Hart, D. & Damon, W. 1985 Contrasts
between understanding self and under-
standing others. In R. L. Leahy (Ed.),
The development of the self. Orlando :
Academic Press. pp. 151 - 178.
- Harter, S. 1983 Developmental perspecti-
ves on the self-system. In P. H. Mussen
(Ed.), Handbook of child psychology.
Vol. 4. Socialization, personality,
and social development. 4th ed. New
York: John Wiley & Sons. pp. 275 - 385.
- Honess, T. 1980 Self-reference in chi-
ldren's descriptions of peers: egocent-
ricity or collaboration. Child Develop-
ment, 51, 476-480.
- 石橋由美 1987 幼児の仲間と自己についての概
念の発達 札幌医科大学短大年報 No 3&4, 99-110.
- 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達
東京大学出版会
- Keller, A., Ford, J. R., L. H. & Meacham, J. A.
1978 Dimensions of self-concept in
preschool children. Developmental Psy-
chology, 14, 483-489.
- 松田 惺 1986 自己意識の発達に関する最近の研
究 教育心理学年報 第25集 pp. 54-63.
- Perry, D. G. & Bussey, K. 1984 Social
development. New Jersey: Prentice-
Hall.
- Scarlett, H. H., Press, A. H. and Crockett,
W. H. 1971 Children's descriptions of
peers: a Wernerian developmental an-
alysis. Child Development, 42, 439-453.
- Shantz, C. U. 1983 Social cognition. In
P. H. Mussen (Ed.) Handbook of child
psychology. Vol. 3. Cognitive development.
4th ed. New York: John Wiley & Sons.
pp. 495-555.